

LDOCE² (1987) の定義語彙2000語を検討する

千葉大学 村田 年

はじめに

ある辞書に慣れ親しみ、毎日のように使っていたとすれば、その定義語彙は学習者の認識語彙として定着するばかりでなく、やがて発表語彙の中核をなすものとなる。それ故、LDOCEが定義語彙を2000語に制限したことは大きな意義を持つ。

一般に基本語の選定基準としては、(1)frequency (2)range (3)coverage (4)availability (5)learnabilityなどが考えられるが、これらの基準は定義語彙としてもいずれも重要である。定義語彙が一般の基本語彙と異なる点は、(1)変化形を許す、(2)接辞を用いて多数の派生語を作ることを許す、(3)特定の語の使用頻度が極めて高い、などであろう。以上の点は語彙リスト本体にはそれ程の質的な差を作らないと判断される。

1. 目的

学習基本語の立場から、LDOCE² (Longman Dictionary of Contemporary English, New Edition, 1987) の定義語彙2000語が認識語彙リストとしてどの程度有効なものであるかを、他の語彙表と比較しつつ検討する。

2. 分析と結果

2.1. LDOCE¹ (1978) と Michael West, A General Service List of English Words (1953) との比較

2つの表を突き合わせてみると、ほぼ一致し、LDOCE¹は後者を少し改定したものであることがわかる。

2.2. LDOCE¹ と Basic English (1932) との比較

Basic English は850語であるが、接辞による派生語等を許しているため、約2000語の語彙と推定できる。Basic English の語彙の約96%が LDOCE¹ に含まれており、LDOCE¹ は Basic English を参照したと推定できる。

2.3. LDOCE¹ と Kučera (1967) 等6種の語彙リストとの比較

『JACET基本語第2次案』を作る際、6種のリストとの比較の結果、LDOCE¹ の96語が不採用となった。

2.4. LDOCE¹ と LDOCE² (1987) との比較

2.4.1. LDOCE¹ より削除された語：156語

2.4.2. LDOCE² に加えられた語：180語

2.5. LDOCE² と「JACET基本語」等の他の語彙リストとの比較

その結果 LDOCE² に入れることを検討すべきだと判断された語は342語あった。

3. 考察

1) LDOCE¹ は West (1953) を基本にしている。West (1953) はさらに Thorndike et al., Interim

9月23日(金) 研究発表第1室(411)

Report on Vocabulary Selection for the Teaching of English as a Second Language

(1936)をほぼそのまま受け継いだものである。もう一つLDOCE¹が参照したと思われる語彙表は Basic English(1932)であり、いずれもたいへん古い。

- 2) Kučera(1967)や Carroll(1971)のような新しい、コンピューター分析による語彙表を利用した形跡はみられない。ちなみに、Longman 社独自のデータベースの作成は1977年に始まっている。
- 3) 「JACET 基本語」に入らなかった96語から固有名詞等を除いたものはほとんどが Kučera (1967)とCarroll(1971)において6000語以内に入らないものである。(例: accordance, alcoholic, apparatus, archway, armour, bacteria, basin, bowel, Buddhism など) これは2000語の5%に当たり、望ましいリストとは言い難い。
- 4) LDOCE¹からLDOCE²への改定は336語の異同があり、大きな改定と言える。主な改定点は(1)頻度の低い語の削除(mosque, prick, prickle など)、(2)頻度の高い変化形・派生語の掲載(beginning, careful, careless など)、(3)近年使用頻度が増している語の掲載(airport, chairperson, calculator, computer, engineer, manager, structure など)、(4)曜日・月の名称などの固有名詞をはずす。(English は例外)。(5)数詞を入れる(two だけがない)。加えられた180語は概ね望ましい語である。ただし、farmyard, footpath, footstepなどは必要ないのではないか。この語彙表は、2語を連結して複合語を作ることを許している(例: hairstyle)。また派生語を自由に作ることを許している(例: illegally)
- 5) 実際の語数は、LDOCE¹が約2100語、LDOCE²が約2124語であるが、変化形を作ることを許している(例: forgetfulness, unexpectedly, well-advised などの形)で使われている。これらを数に入れると総数は推定困難であるが、少なくみても5000語を超えるであろう。
- 6) 一方では、LDOCE²に載せるべきだと判断される語は多い。(例: able, anybody, cabbage, calendar, campus, cancel, candy, capable, carpet, cash, constant, contact, contest contrast, couple, create, culture など)

4. 結 論

以上見てきたように LDOCE²(1987)はLDOCE¹(1978)に比べて確かによくはなっているが、まだ欠点が多く、さらに大きな改良の必要があると判断される。

以下3点の試案的な提案をしたい。

- 1) すべての語に品詞をつけるべきである。
- 2) 頻度と分布度によってまず基本語彙表を作り、次に第2段階として、定義に使用したすべての変化形、派生語、複合語を表にして示すべきである。この表が大きなものとなった場合には何らかの調整を行ない、non-native 用の学習辞典としての規模、例えば、4000~5000語にすべきである。また、そのような作業をすることによって、一般の「学習基本語彙」と「定義語彙」の差がもっとよく見えてくるものと思われる。
- 3) 巻末で接辞による語形成の概略を説明し、さらに辞書の本体の各接辞の説明を詳しくする。